

ダルマ王の二子と吐蕃の分裂

山 口 瑞 凤

別稿で筆者は、ラルン・ペルギ・ドルジュ lHa lung dPal gyi rdo rje によるダルマ王暗殺は虚構であり、実はバー・ゲルトレ・タクニヤ dBa's rGyal to re stag snyā によって

殺害されたものであることを明かにした。ダルマ王はバー氏とド'Bro 氏に代表される争いで発端となつたクーデタの犠牲者と云うことが出来るかも知れないが、どれ程破仏に積極的であつたかは必ずしも明かではない。伝承中に数多く語られていることは、統一政権の分裂によつて往年のような国家的保護を教団に加わえることが出来なくなつたという一事であり、その伝説的表現であるに過ぎない。『唐書』吐蕃伝に伝えられる会昌二年の条下の「無子」以下の記述について、従来、『通鑑』の解釈に従つてその文の主語がダルマ王であるとされてきたのに対しても筆者はレルバチエン王でなくてはならぬ旨を示した。⁽²⁾これによつてダルマ王がバー・ゲルトレに暗殺されたことがわかるのであるが、同時にダルマ王の二

子についての記述は会昌三年の条で僅かに触れられる以外『唐書』吐蕃伝にはないとになる。

『唐書』が考察の対象にならないとすれば、ユムテン Yum brtan'、ウースン 'Od srung についての情報は、サキヤパの古い伝承と古典三史料、それに『学者の宴』⁽³⁾に示されるものから求められねばならない。これによつてペリオ・チベット文献八四九に見える諸王の名に何らかの解釈が施されるならば大成功であるが、これは必ずしも困難ではない。

『唐書』が考察の対象から外された積極的理由は「無子」以下の記述がダルマ王に関するものと考証されたからであるが、消極的理由として、それがユムテンを指すことも、ウースンに当ることも云えない旨を述べねばならない。その為に「無子」以下の記述をユムテンまたはウースンについて述べたものと主張する佐藤長氏と H.E. Richardson 氏の夫々の説が成立しない」とを明かにすべきであろう。⁽⁴⁾

一番古いサキヤペのソーナム・シヨモ bSod nams rtse mo (1142-1183) の『仏教入門』 *Chos la 'jig pa'i sgo* (1167) は、ランダルマ *gLang dar ma* がペルギ・ドルジ⁵に殺されたりと述べた後、その王の御子ティ・ナムデ・ウースン Khri gnam lde 'od srung といわれるもとのその兄弟 (mched zla) ルマテン とが王権を夫々に分けて (CJG, f. 313a, l. 4)° と示している。

次に、同じサキヤペのタクペ・ゲルツ⁶ *Grags pa rgyal mtshan* (1147-1216) の『チベット王統記』 *Bod kyi rgyal rabs* (著作年不明) ではペルギ・ドルジ⁷によるランダルマ の殺害を云ふ。つて

ウースンヒュムテン二人は兄弟であるが、ウースンは水のと亥 (八四三) の年にプルプ *sPur phu* に生れ、(生れて) 直ぐ王権をとり、三歳 (六三歳の誕生日) にして木のと丑 (九〇五) の年ヤルルンの地ペン *Yar lung sa 'Phangs* で歿した。ユムテンは三六歳に死んだと云われる。この二人の時代から悪い時代が始ったのである。辺境の国土は失われ、チベット国内は争つた。(しかし) それら父子三人の間柄に汚れ (*btsogs pa*) はなかつた (本当の父子であつたところの意味) (GBG, f. 199a, ll. 3-4)°

と述べて、最も具体的な情報を提供している。なお、ウースンの死についてソーナム・シヨモの『仏教入門』廿二木のと丑 (九〇五) の年ツアン *gTsang* ルマル *gYo ru* の王 (btsad po) ティ・ペルコルツ⁸ *Khri dpal 'khor btsan* がツアンのトムペ・ラツ⁹ *Grom pa lha rtse* にお住みになつて後御父 (ウースン王) の葬儀をなめつた。その時に数えると仏滅後三〇三八年になる (CJG, f. 316a, l. 5)°

とあつて歿年のみが示されている。タクペ・ゲルツ¹⁰以後この王の年齢とされるものから計算すると八四三年の生れとなる。この点で両者に矛盾はない。

パクペ *Phags pa bLo gros rgyal mtshan* (1235-1280) はその『チベット王統記』 *Bod kyi rgyal rabs* (1275) 廿にヒュムテンには全く触れず、ランダルマが殺されたとしたあとで

その御子ウースンは胎児であつたが水のと亥 (八四三) の年に生れになつた。(生れて) 直ぐ王権をとり、六三歳の木のと丑 (九〇五) の年ヤルルンのペンダ *Phang mda'* で歿した (PBG, f. 361a, ll. 5-6)° とする。

前二作によればウースンヒュムテンは兄弟であり、タクペ・ゲルツ¹¹が特に彼らには父子の間柄に疑うべからん

がないとしている。その生誕年はウースンのみについて示されるが、大妃の子ユムテンがずっと先に生れておれば相続問題はなかつたと思われるので、同年誕生と想定して置きたい。それを用いてタクペ・ゲルツォンの「うとい」をとれば、ユムテンは八七八年歿となる。ウースンの歿年は六三歳とされるので、九〇五年を三作共通の死亡年にに対する証言とみてよいであろう。

ところが、古典三史料には一転してどれもがユムテンの正統性に異議を唱え、ウースンの生年を明かに示さないで、自ら想定したダルマ王の歿年にからませてそれを考え方直したと思われるものも見える。

まず、クトゥン Bu ston Rin chen 'grub (1290-1364) の『仏教史』*gSung rab rin po che'i mdzod* (1322) ではランダルマの大妃は「私に御子が宿つた」とした後嬰児を求めて「昨晩生れました」として示したので、大臣達は云つた。「昨晩生れた嬰児に歯は生えないが、母妃のお言葉を信用します」と云つたのでユムテンと呼ばれた。その御子はチヤル・クンポ Khri lde mgon po' その御子はグンニョン mGon gnyen……、以上大妃の系統である。小妃の胎にあつた御子が木の山田（八四五）の年に生れた。大妃が殺したり奪つたりするのを怖れて、昼は田の光に、夜は灯火の光を絶やせずに守つたのでウースンと呼

ばれた。王位についた六十歳で亡くなった。その御子ペルコルシュン dPal 'khor btsan は十三歳で王位に登り、三十一年で歿した。その御子は一人で、タシ・ツォクペペル bKra shis brtsegs pa dpal ルティ・キーデ・ニマグン Khi skyid lde nyi ma mgon の一人である。………… (SRD, f. 125a, l. 5-f. 125b, l. 4)。

とある。後部にある二系統の比較は後段でとりあげるとしてある。ウースンの死亡年齢はサキヤペ三伝承と同じであるが、その生年は八四五年という独特のものになつてゐる。『フラン・テプテハ』*Hu lan deb ther* (1346) ではダルマ王の死後のこととして

大妃が嬰児を求めて妃自身の子としたもの、御父母がお言葉を確認なめたのでユムテン（と称せられたもの）が現れ、彼がウル dBu ru を掌握した。小妃の胎にいた御子が生れたが、それを大妃が奪うかと怖れ、夜は灯火をつけて守つたのでウースン（と称せられるもの）が現れた。そのものがヨル g-Yo ru を掌握してウルとヨルとで争つた (HLD, p. 18b, l. 8-p. 19a, l. 1)。

と述べ、双方がウルとヨルを夫々掌握して争つたことに触れている。大妃が嬰児を他に求めたとする点は同じである。ラマダムペ・ソーナム・ゲルツォン bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan (1312-1375) の『諸王統史明示鏡』

rGyal rabs nams kyi byung tshul gsal ba'i me long chos 'byung (1368) には一挙に説話的潤色が増して、

そこで罪深い王が殺された後、小妃に正系の御子がやどつていたのがわかつた。ときに大妃が心中に「このものによつて私の権力が損なわれる」とは確かである」と思つて、身体に布を巻いて「私もおなかに御子がやどつた」と小ちい腹を偽つて大きくしたのであつた。そこで小妃に月満ちて嫡出であることの確かな御子がお生れになつた。まゝに愛らしかつたので昼は人にかこまれ、夜は灯火にまゆひれたのでウースン王 (*mnga' bdag*) と云われた。その時、大妃もまた生れたての乞食の嬰児を買つて馴づけ、「私にもこの子が生れたのだ」と云つたので、誰も疑つたが、大妃は権力が強かつたので口にすることが出来ないまま、御母が仰云るとおりと認めたのでユムテン王と云われた。この二王は成年に達しなかつたが、法を渴仰する大臣達が願つて……壊れた寺などを再び修理したのであつた。それから政見が合わなかつたのでウースンがヨルを掌握して内争をしたのであつた (GSM, f. 99a, l. 4-f, 99b, l. 1)。

と示され、ウルとヨルの内争の前に和平があつたのが破れたかのように述べられている。しかし、このような説明はこれまでどこにも見られなかつた。

はあるか後代になるがペーウォ・ツクラク・テンワ *dPa' bo*

gtsug lag 'phreng ba (1504-1566) による『学者の宴』*mKhas pa'i dg'a ston* の古史部分 (Ja, 1545) には出典は示れないがより具体的な記述が見えている。以下ではダルマ王について次のように示す。

以後チベット全体を支配する王はいなくなつたので東北部は小ちい分裂したと云えられた。翌年火のと卯 (八四七) の年に小妃ツヨポン氏の女・ツヨンモペン *Tshe spong bza' bTsan mo' phan* にやどつていた御子が生れ、大妃が殺したり奪つたりするのを怖れて明りを離さず守つたのでナムデ・ウースン *gNam lde 'od srung* と名づけられた。その時大妃ナナム氏の女 *sNa nams bza'* も歯の生えた嬰児を「昨夜私から生れた」と云つて示したので大臣達は云つた「昨夜生れた嬰児に歯がニヨツキリ生えているが、御母のお言葉を信じます」と云つたのでティイデ・ユムテン *Khri lde yum brtan* と名づけられたと多くの文献が書いており、ユムテンが正系でないかのようにも云われるが、後の九侯 (*rje tshan dgu po*) の大部分がユムテン系であり、正系でなければ(争いは起らぬ) 王領の国境地帯が失われなかつたであらうから、大妃・小妃の二子が等しく正系であつたらし。これらの文献はまたウースンに偏つた人々によつて書かれたものに過ぎないのである (KGG, f. 139a, l. 7-f. 139b, l. 3)。

以上のようにウースンの生年以外は頗る冷静に見ていて、小妃大妃の氏族名、小妃の名も明かにしている。その信憑性を知るために敦煌チベット語文献を見ると、ペリオ・チベット文献一二一に

bod yongs gyi (rgyal po) chen pho/lha bal dum na
bzhugs pa/jo mo btsan mo 'phan gyi pho brang 'od srung
rjes 'bangs 'khor dang bcas pa dang/

チベット全土の大(王)ラペルドゥムにまします方、王妃ツヨンモペンの宮居ウースン(の)従者と共になる家来となり、同九九九には

jo mo btsan mo 'phan gyi yum sras gyi pho brang 'od
srung gi sku yon du
王妃ツヨンモペン御母子の宮居ウースンの御支出により
とある。しかし、右のウースンは宮居の名である」とがわかる。」の証据にいたために回二二〇中の

(7)

II

」のようにして神子ティ・ウースンツヨン御母子の表現にみるが、王名が得られたものと思われる。前記の pho brang 'od srung を「第二王子ウースン」と読む試みもあるが、九九九の用例に適合しない上に全く根拠がない。⁽⁸⁾ 最初に見た一二一では少しあとで

btsn po lha sras yum sras rjes 'bangs gyi sku tse

dang

贊普神子御母子(と)家来の御寿命と

とあって、いずれも「御母子」と示され、正しい王名がティ・ウースンツヨン Khri 'od srung btsan であり、その名が母子の住した宮殿名と関係のあることが知られる。これによって少なくとも幼いウースン王の母妃の名を bTsan mo 'phan と認めてよいと思われるので、『学者の宴』の記述の信憑性が確認される。従つて、母妃の出自をツヨンボン氏となし、大妃の出身をナナム氏とする」とも受け容れられてよいと思われる。

ウースンの生年に関する『学者の宴』の説は、ダルマ王の歿年を八四六年とするためにその翌年をとつて定めたものであるから、サキヤペの古い伝承に戻り、これを八四三年に改めるべきであることは云うまでもない。

ウースン王の子孫について年次を明かにするものを見る表現にみるが、王名が得られたものと思われる。前記の pho brang 'od srung を「第二王子ウースン」と読む試みもあるが、九九九の用例に適合しない上に全く根拠がない。⁽⁸⁾

ペルコル(ツヨン) dPal 'khor (btsan) は水のと丑(八九二)の年にパンダ Phang da にお生れになった。十三歳になつたのち御父が亡くなり(九〇五)、その後十八(年)

王権をとり、その間百の仏寺をお造りになつて法を崇い、先祖の行績を凌駕した。三一歳の水のと未（九二三）の年ヤルルン・シャルポ Shar po に歿した。その後、チベットの法令は混乱期を経験して土のと丑（九二九）の年謀反があつたと云われる。火のと酉（九三七）の年（王の）墓地が荒らされた。ペルコル（ション）二人の御子は東西 stod smad の二つに分れ、その父子六人によつて王権がばらばらになつて保たれた（GBG, f. 199a, ll. 4-6）。

右の趣旨はパクパもそのまま伝え、簡単に記述している。

ウースンの御子ペルコルツェン dPal gor btsan 水のと丑（八九三）の年にお生れになつた。十三（歳）で王位に登り、（のや）十八年王をつとめて水のと未（九二三）の年に歿した（DBG, f. 361a, l. 6-f. 361b, l. 1）。

ここには叛乱や墓荒しの年次は示されていない。

タクパ・ゲルツェンがウースン、ユムテン分裂後の内争とペルコルツェン歿後における叛乱、墓荒しを分けて述べているに対し、ショルパの『フラン・テプテル』では一転してユムテンがウルを掌握し、ウースンがヨルを掌握し、ウル、ヨルの内争があつたとした後、

この二人の王の代に土のと丑の年に叛乱が起り、火のと酉の年に諸王の墓地が毀された（HLD, p. 19a, l. 1）。とあってそれらの年次を二王在世時におさめている。これを

換算すれば夫々八六九年と八七七年になる。『王統明示鏡』もウースン在世中の条に同じ年名でこれら二つの事件を伝えている（GSM, f. 99b, l. 1）ので西暦では右と同年になる。

これらはウースン側に起つた事件である。ただ、古典二史料の年次は極めて不自然である。もし、ウースン在世中の八七年、叛乱から九年目に祖先の墓地を荒される程零落したものならなおヤルルンの地にとどまりえたであろうか。これはむしろペルコルツェンの二子の時代に離散して西方に亡命した時の事情とするのにこそふさわしい事件と考えられる。

ウースンの葬儀はツアンのラツェで行なわれたとソーナム・ツェモは云うが、その死亡地はヤルルンであるとタクパ・ゲルツェンは示す。その子ペルコルツェンはヤルルンに生れ、ヤルルンに住し、在世中百か寺を造つたと後者は云う。百か寺はチベット字形の類似から八か寺と改められるべきであり、その点をソーナム・ツェモは

それからウースンの御子ティ・ペルコルツェンの御代にメンルン sMan lung など仏寺や道場（dben sa）八つが造られたのである（CJG, f. 313, l. 1）。

と正確に示している。先述のように、ウースン在世中に問題の混乱事件があつたとする『フラン・テプテル』も

ウースン王の御子ペルコルツェンは八つの仏寺を建立した（HLD, p. 19b, l. 6）。

と伝えてい。勿論、混乱後に立ち直つての挙があつたと言えなくもないであらうが、古い史料が混乱の時期を明確にペルコルツォン以後に置いているので、のよだな説は他に論拠がなければ到底成立しない。

右のように元來の伝承では墓地の荒掠の時期とそれに先立つ叛乱をペルコルツォン歿後の事件として記述していたのである。今はしばらくこれを離れていわゆるウル、ヨルの内争にあひて考えてみたい。この点でくわしく述べる古い史料はない。『学者の宴』では

それから一人の王妃（シエポン妃、ナナム妃）夫々の味方を大臣家来達がして、ユムテンはウル（地方）を、ウースンはヨル（地方）を掌握し、ウル、ヨルの争いがなされた。その傾向はチベット全土を覆い尽し各々の地方毎に大妃系政権、小妃系政権 che srid chung srid' 多党、小党 mang tshan nyung tshan' 金部、トルコ石部 gser pa gyu pa' 固食、粉食といつて二つに分れて争つた。

一人の王が夫々二十三歳になつた土のと丑（八六九）の年から始つて家来の謀反が順次におこり、それはまた「中空の鳥に（飢えた猛鳥の）群がり襲うのが見られる」にも警戒された。第一はバー・コシヨル・レクテン dBa's Kho bzher legs steng が首謀者となつてドカム mDo khams に謀反した。それからウルにおいてド氏とバー氏が争つた

のによつてバー・コボロチョン dBa's Lo pho lo chung が首謀者となつて謀反した。それからヨルとおこる尚ムセー・ネッヒン zhang rJe gsas sne btsan が甥ユネ dbon g-Yu sne を殺した。…………」れいはあぐーデンカ・ルンカ Bran ka Yon tan の悪靈がした」とも書かれたと述べられてゐる。著者ペーウォ・ツクラク・テンワも『フラン・テプテル』と同様に「臣下の叛乱」kheng log をウースン時代に置いて説明している。それが誤りであることは先に述べたところであるが、ここでは、その矛盾点が次のように具体的に示されている。

問題の「臣下の叛乱」は土のと丑（八六九）の年に始るとされ、その第一として挙げられるのが、東北国境のドカムにおけるバー・コシヨル・レクテンを首謀者とするものであった。この人物が『唐書』吐蕃伝に見える「末」氏の恐熱=農力であることに何らの疑問を挿む必要もなし。『学者の宴』に示されるこの人物の実名 ming は “Legs steng” であるが、“steng” は字形から “snang” を誤写したゆふわがる。「農力」は *mong lijk* であるから “snang legs” となる。いすれかが顛倒して写されたものであることが知られる。「恐熱」は *k'iwong nžiät* であるが “kho bzher” もり “khong bzher” の形がより適合する。「末」は *muāt* であり “dBa's”

に当る。⁽⁹⁾ 従つて、『唐書』の「尚」は『通鑑』のようになり、⁽¹⁰⁾ バー氏相応の「論」に改められねばならない。

右の恐熱は『唐書』吐蕃伝、『通鑑』によつても会昌三年（八四三）既に自ら宰相を称し、後述のド氏の婢婢と戦つてゐる。つまり、この時の「臣下の叛乱」は八六九年をまたず、その年既に始つてゐるのである。従つて、「土のと丑」の年の方をウースン王治下の八六九年とする事の必然性はこの限りでも失われるのである。従つて、これはどうしても別の、後代の叛乱を指したものとしなければならない。

『通鑑』は『唐書』吐蕃伝に云う「無子」以下をダルマ王とその相続者と理解し、「乞離胡」をユムテンにみたて、殺されたものを「結都那」として、その一族が滅されたことにしている。チム氏と「佞相」が連合して「結都那」一族に対立したと見ているのである。更に、「論恐熱」を「結都那」側に配し、チム氏の立てる「乞離胡」を正統の王と認めないものとして記述し、ド氏の婢婢と対立させている。

『通鑑』のこの解釈はギャイクツアン *rGya yig tshang*、即ち、『漢文史料』⁽¹⁰⁾ の名の下でチベット語に訳された『唐書』「吐蕃伝」にも当然反映されていた筈である。人々は養子と理解された「乞離胡」にバー氏が擁立したユムテンの立場を附会して、ユムテンの王位継承に関する正統性を云々するところからその血統を否定する意味にまで発展させて解釈した

のである。これが古典三史料になつて忽然として現れた新しい解釈の由来と考えられる。

佐藤長氏はこの『通鑑』の解釈を受け容れてその限りで無理のない解釈を試みている。しかし、『通鑑』の筋書きは不都合であり、先ずダルマ王の「無子」が成立しないことを挙げる。次に、佐藤氏の解釈によつて「乞離胡」をユムテン側がすればチベット側の記述に近い理解となるが、ユムテン側がバー氏側、即ち「結都那」及び「論恐熱」とに対立することになつてしまふ。実際はウースン系とド氏の連合が後代まで続き、ユムテン側とバー氏が連合していたと考えられるのでこれも不都合である。

H・E・リチャードソン氏は「乞離胡」をウースンとみなす。その方がバー氏とウースン側の対立を云うことが出来るので有利であるが、ウースンを養子とする点が後代の伝承とさえ合わないので不都合である。つまり、両氏の解釈のいずれによつても然るべき解決は得られない。共に『通鑑』により誤り示された記録を採つてゐるからである。『通鑑』が誤つた記述をしている点を一層はつきりさせるには『唐書』吐蕃伝が恐熱に云わせてゐる一句「宰相兄弟殺贊普」を問題にすればよいであろう。これは『通鑑』の中では「逆臣乱国」に書き変えられている。当時の宰相と云えばバー・グルトレ・タクニヤ⁽¹¹⁾である。従つて、これはバー・コンシェルがバー・タクニヤ、

即ち、同族の「結都那」を非難したことになる。『通鑑』が、「論恐熱」の言葉としては適当でなくなるので『唐書』の二王の句を改めたのであらうが、バー・ゲルトレが「贊普」を殺したという事実の指摘は有効であり、「贊普」をその頃死んだ王のダルマ以外に比定することは出来ない。『通鑑』が「佞臣」を設けて「結都那」の殺害者となし、「達磨」の方を単なる「卒」で示すのは、『唐書』の「用事者共殺レ之」を読み誤っていることを示すものであり、誤りの根元は「無子」以下に対する主語をレルバチョンとせず、ダルマ王としたことに由来している。この点は別稿で詳しく示したとおりである。

『唐書』吐蕃伝ではバー・コンショルに対立した「没盧」即ち、ド・Bro 氏の「婢婢」についてその名が「贊心牙」であると示す。その音は *tsân siam nga* であり、*btsan sum rgyal*⁽¹³⁾ に当ると思われる。これは称号的名称であるから、「婢婢」は実名 (*ming*)⁽¹⁴⁾ であろう。音は *b'jie b'jie* であるから例えれば *byin byin* であつたかも知れない。

「婢婢」の紹介に続いて『唐書』吐蕃伝は
「年、国人以贊普立非是皆叛去。

と示す。会昌三年贊普が即位したが然るべきではないと判断して多くの人々がその権威を否定して去つたと云うのである。『唐書』ではド氏の方を高く評価しているから、ここで批判された王はユムテンであったと考えられる。去つた人々

はヤルルンに拠つてウースンを擁したのであらう。会昌三年は八四三年であり、二王の即位した年になる。いずれの王を指すのにしても、二王による分裂に言及したものであり、ウースン、ユムテン相当の贊普への言及はここで始めて現れるのである。この点でも『通鑑』の解釈は独走したものであることが知られるであろう。

III

ダルマ王の二子、ウースン、ユムテンの後裔に関する最も古い言及はペリオ・チベット語文献八四九のうちにあるように思われる。

そこにはペルコルツォンの二子及び夫々の子とユムテンの子乃至孫についての記載もみえている。関係部分を示すと（数字は議論上関連を示すために付した）。

- 1、*btsan po Khri sa kyi liing*
- 2、長子 *Pal byin mgon*
- 3、*bKra shis mgon*
- 4、*Leg gtsug mgon*
- 1'、*btsan po bKra shis brtsegs pa dpal*
- 2'、*dPal lde*
- 3'、*O lde*
- 4'、*Khri lde*

3''、btsan po bKra shis mgon po (=o)

1''、btsan pa A tsa ra

2''、Khri lde mgon

3''、lHa cig cag she

とある。これらの内のハーナム・シヒヤとタクペ・ゲルシヒの著作から対応する(16)を組みと次のようになる。括弧内はタクペ・ゲルシヒによるものであるが、異字の用いられてくる場合とのみである。

1、Khri skyi lde nyi ma mgon (Khri skyid lding)

2、dPal gyi mgon

3、bKra shis mgon

4、lDe gtsug mgo (sDe gtsug mgon)

1'、Khri bkra shis brtsegs pa dpal (bKra shis brtsegs pa btsan)

2'、dPal lde (dPal sde)

3'、'Od lde ('Od sde)

4'、sKyid lde (bsKyid sde)

2'''、rgyal po mGon spyan

最終的に現れる形は mGon snyen (SRD, f. 125a, 1.5) である。このかほめ照ねぶるの対応関係については後述する。最後のものは外山のシトナトゥカハ・シヨルバ・トトダムペルムル ||| 史料及び『尊者の大宴』を通じて大差がない。今、

注意すべしのを述べる。

1'、Khri sa kyi ling/Khri skyi lde/Khri skyid lding の対応は同一性を保証する。ただし、おもに nyi ma mgon の名のつかないのはタクペ・ゲルシヒの『王統記』のみである。

2' Pal byin mgon/dPal gyi mgon もその間に dPal gyin mgon の形が発音を反映して書かれて gyin/byin は形が崩れて出来たと見えるので問題はない。

4' Leg gtsug mgon/lDe gtsug mgon も2'の場合と同様 lDe gtsug mgo の形をもつて le/lde のありふれた交錯が起つたのと興味だ。

3''、btsan po bKra shis mgon po は王子として示した3' のものと間違つて繰り返し示したである。

1' おもに書かれてある。

2'' rgyal po mGon spyan はハーナム・シヒモが

九〇五年に書いたカーベン王の葬儀を述べた後、

この世 rgyal po mGon spyan せんヨル・タクカル

'Phan yul Brag mkhar は書かれだ (CJG, f. 316a, ll.

5-6)。アルマーニーのや頃。ハーナムのタクカルは後代がハデハペ dGa' ldan pa の領地として有名などいろであり、ラサに近いカルの城である。ウルはコムテンの所領であり、タクペ・ゲルシヒの記述によるとコムテンは三十六歳 (八八

〇年)に歿し、当時はその子または孫の治世であった。このことが反映されているのである。

ユムテン系についてはサキヤパ系の古伝承に伝えるところは他になく、⁽²²⁾ 古典三史料を参照する以外はない。プトウンではやや異なるが、他の二書は『学者の宴』も含めて殆んど同じ系譜を示す。まず、プトウンの示すところを見ると、

—Khri pa (mnga' bdag Khri pa, GSM.)—

しかし、細部の相異が現れる（HLD, p. 19a, ll. 1-4, p. 19b, ll. 3-4; GSM, f. 9b, ll. 3-5; KGG, f. 141a, ll. 4-6）。

Rig pa mgon po— Khri lde po — 'Od bo
Nyi 'od dpal mgon — mGon spyong— Tsha nal
Ye shes rgyal mtshan

卷之三

A tsa ra
m Gon po btsan
m Gon po brtsegs (SRD, f. 125a, 1.5-f. 125b, 1. 1)

となつてゐるが、他の三書では(『フラン・テプテル』によつて示す。他書の相違のみ括弧内に記す)

Yum brtan—Khri lde mgon (Khri lde mgon snyan, GSM; Khri lde mgon gnyan, KGG.)—

—Khri lde rig pa ngor (Rig pa ngor, GSM) —
—lTe so (lDe bo, GSM, KGG)
—rDo rje 'bar—

—Khri dbang phyug btsan—Tsha la na Ye shes rgyal mtshan
(Tsha ra Ye shes rgyal mtshan, GSM; KGG)—

回文献で Khri lde mgon の直前に置かれた btsan po A tsa ra とは誰であろうか。前掲の表には Khri pa (mnga'

bdag Khri pa) の因子の筆頭に「」の名が示されるが、これは後期仏教伝播期の十世紀後半以後であつて当らぬ。ただ、クトゥンが 'Od bo の二子として示す中の子は Atsa ra の名があり、他の二兄弟の名は共に mgon po をもつていてるので、ある二子 Khri lde mgon spyan (/gnyan) もしくは mGon spyan (/snyan) と並んで示されるべきものを誤ってやけに配置したのではないかと思われる。更に想像を逞しくして「A tsa ra せ mGon spyan (/snyan) の異名であったのがも知れぬ」の想像を用ひるなり、btsan po A tsa ra へ Khri lde mgon は同一人物になる。両者を兄弟もしくは親子と推測するのも許されるであろう。いずれにしても Khri lde mgon の方はユムテンの子であると確認して差し支えないと想る。

ダルマ王の二子の系統はなおその後継者を辿ることが出来る。しかし、本稿では佐藤長氏とりチャードソン氏の説を点検する根拠が予め示されれば足るのでそれ以後の後裔への言及は控えることにしたい。

「」の離胡」がチム氏尚延力の子であると『唐書』に示されているとする立場から、『学者の宴』即ち、『ケーペーガートン』中の記述に「ユムテンがナナム大妃の養子」とあるのを調整しようとした試みである。ここで注意すべき点は、先にダルマ王のクロノロジーを論じた時にクトゥンによる『大史』の引用文と称して引用したものと、ここで単に『学者の宴』からの引用としているものが続いた一連の文であることである。この文の終りに、ユムテンを養子とするような話はいくつもあるが、ウースンに偏ったものによる偏見の書であると『学者の宴』の著者自らが意見を示している。⁽³⁰⁾ 従つて、この著者の

IV

佐藤長氏は『通鑑』による『唐書』吐蕃伝の「無子」以下の解釈を全面的に受け容れ、これをダルマ王の後の相続であるとする立場をとり、古典三史料以後にしか現れないユムテ

まとめた註解であつて先の文も後の文も『大史』とは関わりがないのである。

佐藤氏は原著者の「ユムテン養子説は妄説」とする意見に目もくれず、問題の文もここでは『大史』よりの引用文とは示していない。同氏は漢藏の異つた二つの記述を調整するのに当つて

他の個所及び他書ではすべて大妃とするだけで、その出自は明示されていない。そのことを前提に置いて考えると、やはり大妃は眞実はチム氏であり、従つて乞離胡もチム氏尚延力の子であり、生母が尚延力の夫人ナナム氏であったために、ケーペーガトンは生母を養母と取り違え、ナナム氏と信じてしまつたのではないか。

とまことに穿つた解釈を施している。もし、尚延力なる人物

の所在を別に云うものがあり、チム氏とナナム氏の婚姻に触れるものでもあればともかく、王妃の出自を誤つて実母の名をもつてきたとする説明は別の考証なしには安易に受け容れられないであろう。まして同じ文に見える小妃の名は既に見たように敦煌史料に見えるものと一致するのでその信憑性は高いから『学者の宴』の文を妄りに改められないのである。

佐藤氏は、先に見た（二二〇頁）ペルコルツェン歿後、王墓の荒掠に先立つて起つた臣下の叛乱について『学者の宴』の

記事を再びクトゥン著述の『大史』よりの引用と誤解して示

し、ウースン時代のバー・コンシェルのド・婢々に対する抗争と結びつけている。このクロノロジーが誤りであることは既に示したとおりである。『大史』の引用文は『学者の宴』の韻文部分³²⁾, 14a, 1.5-14Db, 1.7のみであり、佐藤氏の引用した当該箇書には出典が示されていない。なお、その訳文に「ツェンボ二人は二十三年経たる牛の年（巳丑、八六九）に『王政を』とり、臣下の諸乱相ついで起れり」と示されるが、そのようには書かれていらない。先に示したように「二人のツェンボが夫々二十三歳になった土のと丑の年以来家来の謀反が順次に起り」、とあり、その文はバー氏とド氏の対立にこの年を誤つて結びつけた記述になつてゐるのである。勿論、墓地荒掠の時期も六〇年早く示されている。佐藤氏の示す史料は他もすべて新しいことに注意したい。

ウースン王の三十九歳、八八五年歿説は古典三史料にさえ見えないもので、『学者の宴』はこれら二王の系譜を『ヤルルン・チョオの仏教史』と『ブトゥン仏教史』に拠つたと示しているから、『ブトゥン仏教史』に見えない以上『ヤルルン・チョオの仏教史』に拠つたと見るべきであろう。この仏教史は別稿で示した³³⁾ように一三三六年に書かれたものであつてサキヤバの古伝承を覆す權威は全くないから、他の反証を伴わない限り考慮に値しない。

また、ペルコルツェンについての諸年次³⁵⁾もヤルルン・チョオ

に拠つて示されているらしく⁽³⁶⁾、サキヤペの三伝承とは三一歳歿以外みな異なる。「父十九歳の木のと酉（八六五）の年に生れた」とあるから、父の生誕を八四七年に置いているので『漢文史料』の影響下のダルマ歿説に動かされていることが明かり、上掲のウースン死亡年をもとに置くものでやはり、サキヤペ三伝承を動かすものとは到底考えられない。

佐藤氏は敦煌文献出てくる

jo mo btsan mo 'phan gyi pho brang

を引用して、ラルー説を却け、トウツチ氏の説をとり、ポタン pho brang を第二子の意味にとるが、その根拠を調べていない。トウツチ氏説にはそのような意味を保証するいかなる典拠も示されたことがない⁽³⁸⁾。本文二一八頁に示したペリオ・チベット語文献九九九のように母子の住んだ宮殿を云うものであり、他意はない。この語が宮殿の意味を示す例をもつ敦煌文献はペリオ・チベット文献一〇八五、一〇八八、一八八、一五九二等があり、トウツチ氏説にはそれに適した用例が全くないので拠るべきでない。

ユムテンの年齢について八四六年に三歳とするのは、『唐書』の「乞離胡」をユムテンとみなし、たとえ『唐書』が「時に三歳である」と示したものであってもそれは会昌二年の頃であるから、八四〇年生れとなるので矛盾する。また、八六九年に両者が分裂したと云う理解も『学者の宴』の一節

の読み違いであり、とるべき見解ではない⁽⁴¹⁾。ユムテンの歿年もサキヤペ古史料の三六歳説を用い、ウースンと同年の誕生として八四三一八七八年とするのが穩当であろう⁽⁴²⁾。

佐藤氏と異り、ウースンを「乞離胡」に当て、ダルマ王系の断絶を云うのがH・E・リチャードソン氏の説である。この著者には漢文史料の訳文が絶対であり、批判の対象にならない⁽⁴³⁾。不都合な部分は曲解付会することで終始している観さえある。極論した果てにユムテンは、ウースンの非正統性をとり出してそこに托すためにつくられた幻ではないかと云う⁽⁴⁴⁾。

リチャードソン氏は古代史の議論に『テプテル・ゴンボ』まで用いる⁽⁴⁵⁾。ほぼ同時代に出来た。『学者の宴』は古い引用文献のあるために古代史の議論に登場するのであり、これと同じに『テプテル・ゴンボ』を用いては混乱を増幅するのみであり、一般的にこの書を依用すべきではない。

『唐書』吐蕃伝の「無子」以下の主語をダルマ王とし、「乞離胡」に Khrī'od srung のイタリック部分をあてる。⁽⁴⁶⁾「無子」の主語についての議論は既に尽したので云わない。Khrī'od の対音ならば「乞離鶴」などのように終子音を写して示すのが当時の慣用であり、『唐書』吐蕃伝冒頭を参照すればよい。

場合のような養子であるとの伝承れどもな」。

ウースンの母シヨンモペーンとして先述のような「姫殿」の意味で示された *pho brang* もとりあは、ヌウチ氏の「⁽⁴⁾第二氏」の意味を否定するが代りに *its use here, rather, than *pha sras*, may indicate that the person, though regarded as heir presumptive, was not a prince of the royal blood.*

⁽⁵⁾ 全く如何なる根拠めどもないのみならずを「⁽⁶⁾」とし、学問的な議論を交わす」とは不可能ではないかとわれ感じられる。“*pho brang*” は故ラルー女史の訳したとおり「⁽⁷⁾ 姫殿」の意味であり、“*pho brang gi sku yon*” とは「⁽⁸⁾ 宮殿の御出費で」の意味以外はない。

リチャードソン氏の空想的理説は果しがない。敦煌文献にウースンの母として見える *jo mo bTsan mo 'phan* を実は叔母だったのではないかとし、同氏の立場では、これは「大妃」とやれるナナム妃にちむねれるべきであるが、おそらく混同しているよう述べてあるのではないかと思われる。⁽⁵¹⁾ 佐藤氏がユムテンの生母をナナム氏となし、養母をチム氏ではないかといたのと似ている推測であるが、更に空想的な曲折した臆測になつてしまふ。『学者の宴』はウースンの母をシヨポン氏と称し、*bTsan mo 'phan* と云う名を正しく伝えてしるから、この敦煌文獻の記事によってウースン

の実母はシヨポン氏出身のシヨンモペーンと一般に確認されてよい程である。しかし、リチャードソン氏は『唐書』の記事が正しく述べればと称して、その臆測を更に押し進める。先ず、『唐書』に「⁽⁵²⁾ 緣」であるのはペリオの「⁽⁵³⁾ うよう」と *mChims* ではなく *chen ma* を指すのではないかと云う。理由として『唐蕃會盟碑』には「⁽⁵⁴⁾ 緣」ではなく「蹠」が用いられてくるからと述べ、「⁽⁵⁵⁾ 緣」の現代音から *chen* と書くとするのが、「蹠」と「縁」の古音は全く同じ *tjam* となり、*chen* とは遠い。また、漢文史料がチベット字を写す場合文字を選択の余地が多くとも全く考慮していない。

ついでその説を追うと、*chen ma* の *sNa nam* 妃が兄から貢い、⁽⁵⁶⁾ 「⁽⁵⁷⁾ 緣」は *chen ma* を謂いつらむとして、百歩譲りの説を迫るが、*chen ma* の *sNa nam* 妃が兄から貢い、⁽⁵⁸⁾ いうけて養子にしたのがウースンであつたとリチャードソン氏は云う。つまり、同氏は『唐書』の文について「妃縁」の養子が「乞離胡」であるとする解釈を立て、それにウースンをあてはめた上で『学者の宴』が養子の方をユムテンとし、*Tshe sponge bza' bTsan mo 'phan* をウースンの母とするのはそれは後代の伝承に合せた創作であるかも知れないとも云う。この解釈について『唐書』には養子が一人しか示されていないからと云うのが唯一の根拠なのである。

今見たとおり、リチャードソン氏は、『通鑑』を参照して示された漢文史料の訳文を毫も疑う姿勢がないのである。こ

れは漢文史料を直接扱わない限り致し方がないと「⁵⁴」うべきかも知れない。例えば、会昌三年の条に即位した王の是非をめぐつて離反するものがあつたとする記述からウースン、ユムテンの争いについての言及をそこに読みとることも不可能ではない筈であるが、その前の記述がレルバチョン王からダルマにかけての相続を示していたことを知らない場合にそのような理解を求めるのも酷であろう。

ただ、チベット史料が軽視されるのは理解できない。『学者の宴』は敦煌文献と同じ名の bTsan mo 'phan を挙げてツェポン氏と指定し、共にウースンの母としているのを何故率直に認めて漢文史料に明かにチムとするものとの不一致を問題として逐求しなかつたのであろうか。

リチャードソン氏はユムテンの名がソーナム・ツォモやタクパ・ゲルツォンによって言及され、正真の兄弟とされた上、国土を二分して支配したと述べられているのを全く無視しそうが、これこそあるまじき不注意である。

それどころか、リチャードソン氏はおそらく氏出身の妃をウースンの生母と「いた」とあらうか、『学者の宴』が正しく “Tshe spong bza’ bTsan mo ’phan” と記録しているのを単に “Tshe spong bza’ Phan” と示し、これを敦煌ペリオ・チャシュ語文書⁽⁵⁵⁾〇五三に用いてる

gshin ‘Bro bza’ lHa mo ’phan

といわゆる、Tshe spong bza’ ‘phan も ‘Bro za’ 號⁽⁵⁶⁾ト氏出身の王妃であるかも知れないと「うよな記述を示す。しかし、これは全くの誤りである。原史料では

//gshin ‘Bro za lHa mo ’phan gyi bsod nams su
bsngoste

故ト氏出身の妃ラモの追善供養に廻向して

とあるので “’phan” は名の一部ではない。ペリオ・チベット文献団〇一一にあるが、団六回では

//gshin ‘Bro za lHa mo // zhus / ’phan gyi bsod namsu
bsngo ste bris pa

とあって、明確に区切りがついている。なお、‘Bro za lHa mo はかつて見たテイック・チション王の母回である ‘Bro bza’ lHa rgyal mang mo rje Khri mo legs gun skar の尊号の略称であふれられる。従って、(Tshe spong bza’) bTsan mo ’phan とは如何なる関係もない。

リチャードソン氏はカルチョン寺の崇仏誓約署名者のうちから zhang sNa nams gNyan lod なる人物を見つけたていて「妃縫兄尚延力」に当たるとある。先に「縫」を “chen ma” に当たのであらかじめ「妃縫」を “btsun mo chen ma” の訳とみて、その兄を考えたのであらうが、それならば『唐書』みて「大妃兄」なども示した筈である。されば「かへ、」の大妃を sNa nams 出身とする方の『学者の宴』

の記述が何の疑念ももたず採用される。しかし、同氏によつてウースンの実父とされる gNyan lod は残念ながら漢字「延力」の音 *iän liäk* と全く対応しない。この対音は *rgyal mo legs* と *diyal*⁽⁶⁰⁾ るのが普通である。

先に jo mo bTsan mo 'phan を『学者の宴』に *diyal*⁽⁶¹⁾ ポン氏出身ではなくド氏出身でないかと捏造し、ハリで、「尚延力」をナナム・ニヨンルーと付会した上で、明確ではないが、ウースンをダルマ王の実子ではなく、上記二人の子であるかのように思わせ、ナナム出身の大妃がウースンの父の妹であり、養母であるとみているようである。

『学者の宴』でウースン王の母方ツェポン氏と対立するとみられているナナム系の大妃を、ウースンの養母と比定する大胆⁽⁶²⁾ さもある」とながら、サキヤペの早期の伝承中に漢文史料(『通鑑』的解釈による『唐書』吐蕃伝の理解)と一致してダルマ王に唯一の相続者があつてウースンとされていたかのように明言するのに遭うと、本論中にソーナム・ツェモやタクペ・ゲルツェンの記述を引用してそのような云い分と正反対の説明を確認してきた筆者には云うべき言葉も見出せなくなる。

まして、このような考察から最終的に、本来養子であつたウースンについてその後裔が自らを嫡系とするため他に「養子」の身分を托するためにユムテンを仮構し、その名をウイドゥムテンから創作したと云う根拠のない見解が出されてい

るが、到底容認されない。ユムテンの後裔の名がウースン系程詳細に伝わっていないとしてもそれがあることを忘れてはならない。

ペリオ・チベット語文献八四九にはユムテンの子と曰われる人物の名があり、ソーナム・ツェモはウルのペンユル・ダクカルの王としてそのユムテンの子の存在に言及している。⁽⁶⁴⁾ 右の敦煌文献八四九の記述に殊更正確さを求むべきではないが、Khri lde mgon の名の意義を充分検討せず、そこからユムテンの存在に如何なる保証を与えるものも見出せないとするに至つてはもはや論評の限りでないと云うべきかも知れない。

略印表

- | | |
|------|--|
| CJG, | bSod nams rtse mo ; Chos la 'jug pa'i sgo, (Sa skya bka' 'bum, Vol. Ga. ff. 263-317a) 1167. |
| DTH, | J. Bacot etc. ; <i>Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet</i> , Paris 1946. |
| GSM, | bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan ; rGyal rabs rams kyi byung tshul gsal ba'i me long chos 'byung, 1368, Ed. sDe dge, 104 fols. |
| GBC, | Grags pa rgyal mtshal : Bod kyi rgyal rabs (Sa skya bka' 'bum, Vol. Ta, ff. 196b-200a) |
| GSR, | B. Karlgren : <i>Grammatica Sérica Recensa</i> , Stockholm 1964. |

HLD, Tshal pa Kun dga' rdo rje: *Hu lan deb ther.* 1346,

Ed. Gantok 1961.

KG. dPa' bo gtsug lag 'phreng ba: mKhas pa'i dga' ston,

chapt. Ja, 1545, Ed. lHo brag 155 fols.

PBG, 'Phags pa bLo gros rgyal mtshan: Bod kyi rgyal

rabs (Sa Skya bka' bum, Vol. Ba, ff. 360a-361b),

1275.

SRP, Bu ston Rin chen 'grub: Chos 'byung gsung rabs

rin po che'i mdzod, 1322, Ed. sDe dge, 203 fols.

WYT, H. E. Richardson; "Who was Yum brtan? (*Études*

tibétaines, Paris 1971, pp. 433-439)

「ダ王在位」佐藤長「ダルマ王の在位年次」と「」(『史林』1

九六三年五卯」(111-157頁)

「ダ王殺害」三口龍鳳「ダルマ王殺害の前後」(『成田山仏教研究

所紀要』五、一九八〇年)

「ダ王子孫」佐藤長「ダルマ王の子孫」と「」(『東洋学報』四

九一四、一九六四年、111-17四頁)

註

(1) 指論「ダルマ王の破滅した殺害者」(『勝又俊教博士古稀

記念論文集』東京昭和五五年)。

(2) 略号表「ダ王殺害」参照。

(3) 略号表参照。

(4) 略号表参照。

(5) "pha pad gsum po de la btsog pa med" の意味は "pha spad gsum po de le ma dag pa med" 「父子」人(の謔説)

「(仮解説) 諸縁ただら」である。

(6) ハチ版の SRD, f.131a, 1.7. やはり「ハチ版」の brtan du chug gsungs" もあればが "brtan du chug byas である。

(7) 1. 24 に “brtsan yum sras kyi zha snga nas sku tshe ring zhing...” である “sras” を補う。

(8) G. Tucci: *Preliminary Report on Two Scientific Expeditions in Nepal*, Roma 1956, p. 52, n. 1 に如きの取扱い

に於て “Pho brang is the title of the second son in a ruling family” である。これは学術的では無理な記述であつて、用ひるべきではない。また、他の城や塔等の女虫の訳文を改めることは許されない。ただ、「sku yon」は “yon” 「費用」「資金」「功德」「布施」の勘定である。本文

後段参照。

(9) GSR による表音は「トキ種アドリヤセモニ」。「豊」1005

-a「ト」928-a「タ」1172-d「タ」330-j「未」277-a

(10) HLD, p.12a, ll. 4-6 の後脚の rgya bod lo rgyus deb

ther である。日本語では『トウノ・トコトク』(稻葉正

就、佐藤長共訳、京都昭和三九年) 111-1 四頁にこれが

rgya yig tshang (『藏文史料』) であることを知めて充分な

解説がある。

(11) DTH, p. 102 による 'Bro Khri sum rje stag snang

の如き dBa's rGyal to re stag snya である。その後は示された。ハーネム・ハサウエによれば、1914年当時の詳相せたは zhang sKyid sum rje 最も前者である(CJG,

f. 316a, 1.4) りんがかかる。

(12) 理論「ダ王殺害」（略略表）参照。

(13) GSR ディスク表音「贊」153-a' 「」 663-b' 「牙」37-a

(14) KGG, f. 109b, 1.7 参照。

(15) 後代のチャム・史料は、チャム語『漢文史料』に見えた

る文書類のものによるトマテンを非正統乃至養子と理解
するが、たゞのと思われる。従つて、去つた方がウーベン
を離れてかゝる地を離れたと見てよしである。

(16) CJG, f. 313b, ll. 5-6; GBG, f. 199b, ll. 3-6 参照。

(17) SRD, f. 125a, 1.6-f. 125b, 1.1, ll. 2-4; HLD, p. 19a, ll. 1-
3, p. 19b, ll. 6-8; GSM, f. 99b, ll. 3-5, f. 101a, ll. 4-6, f.
102a, 1.6-f. 102b, 1.2.

(18) チャムー語ではウースンヒュマテンの両系統に同名の
ものが二例見つかぬことを取つあらず、一方を他方の幻影の
よう見出（WYT, p. 438）のは理解しかねる。おりあれた
名称が偶然共通であるとする両系統の名称が併行して類似
する場合の二つた組織を示すか曰わるが、しかし

Khri skyi lde nyi ma mgon と Nyi ma mgon, Rig pa
mgon po と dPal gyi lde rig pa mgon は最も近い字形を
もつた場合に部分的に共通するといふべきであるが、この點は
だ。

(19) “byin” “gyn” は二字形の相似やねつ “gyin” と “gysi” が

後づく形の頭の子音と同化して閉音化して出来た形であ
る。

(20) le/lde の交替は動詞 log/ldogs, langs/ldang, lugs/ldug

の形に確認される。

(21) 本文一一五頁参照。

(22) ウーベン系はヨルヒアンを根拠地とした。従つて、サキ
ヤペの伝承にウーベン系のみ詳細になる傾向が出たのも当然
である。

(23) gpyan ルハ形のチャム字はなじかの snyan/gnyan
が元来の形であろう。後者はヤルラン王家の「種種釋」sku
bla の名である。

(24) 「ダ王子孫」三六一四〇頁参照。

(25) 「ダ王殺害」参照。

(26) 本文一一一頁参照。

(27) 「ダ王子孫」三八一三九頁。

(28) Khri 'dus strong, Khri lde gtsug brtsan (DTB pp. 15
19)

(29) 「ダ王在位」三五頁ト段、「ダ王子孫」三六頁, KGG, f. 139
a, 1.6; loc. cit., 1.7-f, 139b, 1.2.

(30) loc. cit., ll. 2-3.

(31) 本文一一一頁参照。

(32) 「ダ王子孫」四〇頁参照。

(33) 本文一一〇頁参照。

(34) 拙論「諸王統明示鏡」の著者と成立年」(『東洋学報』六
〇—一・一' 一一一八頁) 七頁参照。

(35) 「ダ王子孫」四一一一頁。

(36) KGG, f. 141b, ll. 1-2.

(37) 「ダ王子孫」四一頁。

- (38) 註⁸参照。
- (39) 「ダ王子孫」四二頁。
- (40) 「ダ王殺害」註(29)参照。
- (41) 本文111六頁参照。
- (42) 本文111五一111六頁参照。
- (43) WYT, p. 434.
- (44) *op. cit.*, pp. 435, 438.
- (45) *ibid.*, p. 437.
- (46) *ibid.*, p. 434.
- (47) 「ダ王殺害」参照。
- (48) Od Ide 「瞿堤」『通典』一九〇、辺防大「古蕃」等参照。
- (49) WYT, p. 434.
- (50) 「第11子」の意味では PT. 丸丸丸は「御母子の第11子ウーバン」となり、この訳意を用いても訳文は成立しない。
- (51) リチャードソン氏は bTsan mo 'phan や 'Bro za 虞か、氏出身として、ウースン王『唐書』にバウル氏の姉妹を結びつけたのである (WYT, p. 435)。従って、ナナム氏を父とし、氏を母とするウースンがナナム出身の大妃の養子となつたと見たい様子に見える (*op. cit.*, pp. 434-435)。実父と大妃を兄妹と想像してしまふやうである。しかし、そのような保証を与える記述はない「だめだ」。
- (52) 「慈」→「慈」の音が『集韻』ノムヘト回ノヘ「慈林切」アルヌ GSR. 666-e には「慈」せ *t'iam* ルルモホヘン。
- (53) WYT, pp. 434-435.
- (54) 本文11111頁参照。
- (55) 本文111五頁参照。
- (56) KGG, f. 19a, 1.7.
- (57) WYT, p. 435.
- (58) 「故ルナ・ハヤ(ニ) 蔵アム。追善の福福に向向して書かれたり。」と訳される。"'phan" は今日の動詞 "phan" との古形と思われる。
- (59) 「ダ王殺害」註(48)参照。
- (60) KGG, f. 19b, 1.1.
- (61) 「ダ王殺害」註(44)参照。“rgyal mo”が “rgyam” に縮あり、更に歯音系の legs に同化して “rgyan” と近い発音になる。